学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

柏木の「語らひ人」小侍従－『源氏物語』女性伺候者論－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000053

柏木の「語らひ人」小侍従 ― 『源氏物語』女性伺候者論 ―

池田　大輔

抄録：
『源氏物語』の侍女が、どのようにして手引きする侍女へと変貌するのかを明らかにする。女三の宮の侍女小侍従は、最初から手引きする侍女として語られていたわけではなく、柏木との関わりの中で変貌した。柏木との「語らひ」に注目することで、どのような思惑に絡め取られ、手引きする侍女へと変貌させられてしまったのかを考察する。

キーワード：　語らふ、おほけなし、たばかる、手引きする侍女、小侍従、源氏物語

はじめに

『源氏物語』の侍女が逢瀬への手引きに至ることについて、どのような物語論理、表現機構によって語られているのかをかつて論じた(1)。本稿は、かつての考察で取りこぼした問題―手引きに至る侍女の内実―を明らかにすることを目的とする。

侍女たちの手引きによって、女主人たちは複雑な人間関係に絡め取られ深い苦悩を抱えることとなる。藤壺にはじまり、玉鬘、女三の宮、落葉の宮、中の君、浮舟と侍女の手引き―王命婦、弁のおもと、小侍従、小少将、弁の君、右近―によって深い苦悩を負うことになった女主人たちは多い。したがって、侍女たちの手引きは、女主人たちの苦悩を生み出す行為と言えよう。侍女たちはなぜ手引きしてしまったのか、その内実を明らかにすることは、女主人や懸想する男君たちの内実をも明らかにするという点で重要である。この問いの答えを侍女の「若さ」「思慮の浅さ」(2)に求めるだけでは、十分とは言えないであろう。そこで、多くの対話から手引きに至ることが語られる女三の宮の侍女、小侍従を例に「手引きする侍女の内実」を紐解いてみたい。

一　「語らひつきにける女房」小侍従

小侍従は、女三の宮付きの侍女であり、主人女三の宮のもとに懸想する柏木を逢瀬へと手引きした侍女である。小侍従の手引きは、結果として女三の宮の懐妊と出家、柏木の死を誘引することとなる。『源氏物語』では、さまざまな侍女が男君からの「責む」行為によって手引きに至ることを語っている。小侍従も他の手引きする侍女同様に、柏木から「いかにいかに」と日々に責められ困じ」（「若菜下」二二一二頁）(3)た結果、手引きを行ってしまった侍女のひとりである。『源氏物語』では、男君の「責む」行為が発動した結果、すぐに侍女が手引きを行うことが語られ、男君の「責む」行為と侍女の手引きを一連とした逢瀬への語りの方法としている(4)。そして、この柏木物語の手引きにおいては、「責む」行為以前に柏木が、小侍従と多くの「語らふ」行為を展開していることが注目される。そこでは、手引きに至るまでの小侍従と柏木のやりとりをつぶさに語っているのである。柏木物語では、これまで語られてこなかった手引きに至る男君と侍女の懇願と拒否、承諾の応酬を対話形式で語ることで、手引きを成功させるために苦心する男君の思考や言動

を明かしていく。この二人の「語らふ」行為は、他の男君たちと侍女たちとの手引きの攻防へ重ねて読むことが可能であろう。

男君が女君へと迫っていく方法の一つとして、侍女と「語らふ」行為がある。「語らふ」とは、「語る」行為に長時間の継続を意味する「あふ」が複合した表現で、長い時間にわたって語り合い、互いの意志を通じ合わせる行為であり、互いの親しさを意味する(5)。当然そうした物語空間には、「語らふ」人々の親密さが創出されるわけだが、「語らふ」主体の親密関係を構築するための行動は、作中人物の関係構築における行動規範やその際の内面を考える上で重要である。つまり、侍女との「語らふ」行為は、女君との関係構築の手段であるが、殊、恋愛においては長い時間を要する根気のいる行為なのである。柏木は女三の宮への情念を胸に、いつか婿となることを夢見て小侍従と「語らひ」続けるのである。

次に引用する場面は、女三の宮が光源氏のもとに降嫁してから約一年が過ぎようとした三月ごろ、女三の宮への憧憬・情念がいまなお続いていることを語る文脈である。

(I) その折より語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。「対の上の御けはひ・は、猶をされ給てなむ」と世人もまねび伝ふるを聞きては、「かたじけなくとも、さるものは思はせたてまつらざらまし。げにたぐひなき御身にこそあたらざらめ」と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、〈世中定めなきを、ゆゑの君もとより本意ありて思し置きてたる方におもむき給はば〉とたゆみなく思ひ歩きけり。

(「若菜上」一三六頁)

柏木は、女三の宮降嫁後も自分の情念を抑えがたく、以前近づいた女房に女三の宮の様子を聞くことで心を慰めていた。最初の傍線部「その折」とは、柏木が女三の宮の婿候補のひとりとして求婚していた約一年前を指し、その頃から現在まで「語らひつきにける女房」がいること意味する。そして、この女房こそが小侍従であることは、すぐあとの文脈で明らかになる。小侍従は、その登場からして柏木の「語らふ」対象であった。柏木の登場と同時に、小侍従も物語へと語り出されることは、互いの関係が今後の物語展開において重要であることを示唆している。

その柏木と小侍従の関係性を語る「語らひつく」という表現は、男女の契り以上に婚姻関係に近い表現で、「語らふ」よりも男女の関係を濃密なものとして定位させる表現である(6)。例えば、末摘花の乳母子である侍従は「大弐の甥だつ人語らひつきて、とどむもべくあらざりければ」(「蓬生」三三五頁)と主人(しかも、乳母子が養君)のもとを離れていく原因として語られている。柏木と小侍従は、大弐の甥と侍従の関係までではないにせよ、他の女房たちよりも親密な仲にあることが示され、そのきっかけが求婚者であった「その折」なのである。最初の傍線部には「御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふ」とあるので、ここでの小侍従には、柏木の心を慰める形代的役割が認められよう。また、「語らひつく」という表現に注目するならば、柏木の「めしうど」的侍女の可能性をここから読み解くこともできるかもしれない。そうした雰囲気を匂わせつつも、物語は男女としての側面は語らず、後文において柏木と小侍従の関係性を系譜的な位置づけに語ることで、新たな付加価値をもつ侍女であることを示していく。

二つ目の傍線部では、六条院で女三の宮が紫の上に気圧されていると世間で噂されていることを柏木に伝えた小侍従に対して「言ひはげま」すという一方的な激しい口調で責め立てる柏木の言動が語られる。さらにここでは、先の語らひついていた女房が「小侍従」という呼称で語られ、乳母の子の中でも養君と年齢の近い「御

乳主」(7)という立場にあることが明かされる。小侍従と柏木の関係性は、徐々に明かされていくという語り方で、単なる「語らひつきにける女房」ではない二人の関係も読者の興味を引く要因ともなっている。そして、手引きの直前には、長い二人の対話がある。柏木の心の中では、三つ目の傍線部「[illegible]の君もとより本意ありて思し置きてたる方におもむき給はば」と光源氏が出家した後に、女三の宮を妻にするべく「たゆみなく」時機を待つ姿が語られている。柏木は、来るべき未来に女三の宮の婿となるべく、その媒介者として、小侍従と「語らひつい」ていたことが分かる。柏木と小侍従の「語らひ」とは、当初はこのような〈待つ恋〉を示すものであった。

この場面から、女三の宮との恋に対して、柏木がとても辛抱強く長期的な展望のもと行動する人物であることが伺い知れる。しかし、小侍従のことを「語らひつきにける女房」と語るものの、「語らふ」行為の実態はここでは明らかにされていない。次節では、その「語らふ」内実を考察していく。

二　「語らひ人」小侍従

先の場面（Ⅰ）の直後に六条院での蹴鞠の日のかいま見が語られるのであるが、このかいま見の場面以前に小侍従が登場していることは、注目すべきであると三谷邦明氏は指摘する(8)。三谷氏は、「小侍従の持つ役割の変化が柏木の内面の変遷と照応し」、「柏木の心理の変遷を象徴している」と小侍従の機能を読み解いている。確かに、柏木と女三の宮の密通には、柏木と小侍従の関係、具体的には二人の「語らひ」を通して読者に開示されていく。また、柏木の女三の宮に対する内面の変化と共鳴し合うかのように小侍従との「語らひ」にも変化が見られる。端的には、女三の宮の様子を柏木に「聞き伝える侍女」から女三の宮のもとへと「手引きする侍女」への変化である。小侍従と柏木のやりとりが初めて語られた先の場面（Ⅰ）では、小侍従はあくまで「聞き伝える侍女」であり、柏木の女三の宮との不確定な未来を期待し待ち続ける様子に、語り手も「はかなし」と憐憫のことばを漏らしていた。つまり、物語（密通）の可能性は別として、柏木は最初から密通や略奪を目的としない「語らひ」がこれまでは繰り返されていたことが、小侍従を通して分かるのである。密通への回路や柏木の心内は小侍従との対話を通して展開し、物語に表面化されていくである。

ここで、蹴鞠の日のかいま見後最初の「語らひ」となる導入文を見てみたい。

（Ⅱ）　まことや、衛門の督は、中納言になりにきかし。今の御世には、いと親しく思されて、いと時の人なり。身の覚えまさるにつけても、思ふことのかなはぬ憂れわしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。…〔中略〕…なを、かの下の心忘れられず。小侍従といふ語らひ人は、宮の御侍従の乳母の女なりけり。その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なりければ、早くよりけ近く聞きたてまつりて、まだ宮幼くをはしましし時より、いと清らになむおはします、帝のかしづきたてまつり給ふさまなど、聞き置きたてまつりて、かかる思ひもつき初めたるなりけり。

（「若菜下」二一七・二一八頁）

蹴鞠の日のかいま見より何の進展もないまま七年もの月日が流れ、「まことや」と語り起こされる柏木の物語。この小侍従が登場する（Ⅰ）（Ⅱ）の両場面間には、柏木にとって「全身的な衝撃」であったかいま見が位置し、その意味を捉え直すことで、繰り返される小侍従への「語らひ」が必然化していくと秋山虔氏は述べている

(9)。蹴鞠の日のかいま見から長い歳月が流れ、小侍従は柏木の「語らひつきにける女房」から「語らひ人」として物語に定位される(10)。それは、女三の宮の様子を「聞き伝へ」ることで柏木の〈慰め〉とする「語らひ」が、空白の期間にも繰り返し行われてきたことを示唆していよう。加えて、この空白の期間の最初には、「恋わぶる人のかたみ」(「若菜下」一五八頁)である女三の宮の唐猫奪取があり、「とり籠めてこれを語らひ給」(一五九頁)とあるように、唐猫との「語らひ」が女三の宮の喩(11)として柏木の心を〈慰め〉ていたのである。このように、柏木は「語らふ」人物であることが分かる。

蹴鞠のかいま見から七年もの歳月を経過して語り出された柏木は、女三の宮の姉女二の宮を妻として迎えていた。女三の宮の婿候補として、かつて父太政大臣が語っていた「皇女たちならずは得じ」(「若菜上」三七頁)という意志を体現したことが分かる。ここに至って、物語は「宮の御侍従の乳母の女なりけり。その乳母の姉ぞ、かの督の君の御乳母なり」と「語らひ人」以外の情報によって、小侍従と柏木の関係性を開示する。ここでの系譜語りは何を意味するのか。系譜を語るということは、個人の存在以上の何か、それは権威や人脈といった、新たな共同体の一員としての付加価値を与えることであり、それまで以上の複雑な人物関係の読みを読者に要求してくる。小侍従の系譜語りは、小侍従が乳母の娘であるということ以上に、女三の宮の乳母と柏木の乳母が妹姉関係であることが重要な情報だと考える。つまり、柏木は幼き日より養育者であった乳母によって、彼の乳母の妹(宮の御侍従の乳母)が養育する女三の宮への志向を教育された可能性があるということである。系譜語りに続く文脈では「早くよりけ近く聞きたてまつりて」「かかる思ひもつき初めたる」と柏木が幼少の頃より乳母から女三の宮のことを聞き知り、憧れが生じたのだと語る。だからこそ、柏木の女性観には、「皇女たちならずは得じ」(「若菜上」三七頁)という志向性が備わったのであろう。そして、女二の宮に満足しない理由も、この乳母の影響が考えられる。柏木の女三の宮に対する恋は、「異常な情熱のとりこ」(12)、「幻想」(13)といわれるが、女三の宮共同体の乳母に教育されたことで、こうした志向性を持つに至ったと考えられる。

したがって、「小侍従といふ語らひ人」という表現の背後には、小侍従の親である乳母姉妹のネットワークを基盤とし、小侍従と柏木が幼少の頃から親しく「語らひ」をしていた可能性が浮上してくる。このことは、後に小侍従が「童よりさるたよりに参り通ひつつ見たてまつり馴れたる人」(「柏木」二九二頁)という過去が語られることによって、小侍従を童の頃から見知っていたことが分かる。

「語らひ人」小侍従とは、このような柏木の過去と人物関係の繋がりを背景にもつ表現なのである。加えて、柏木が小侍従のことを「親しきよすが」(「若菜下」二一八頁)と口にするように、系譜語りによって拓かれた血縁関係は、柏木と姉乳母、女三の宮と妹乳母、小侍従が血縁共同体として情報を共有する者たちであることを意味しよう。乳母と養君、母と子(娘)、主従という重層した繋がりの中において、小侍従は柏木の「語らひ人」と称されるのである。ところで、このような繋がりの中、小侍従にとって柏木の存在はどうであったのか。次節では、「語らひ」に注目し、柏木を手引きしてしまった小侍従の内実に迫りたい。

三　「語らふ」柏木と小侍従

これまでの柏木と小侍従の「語らひ」に着目してみると、当初語られていたのは女三の宮への想いの〈慰め〉としての「語らふ」行為であった。しかし、それが次第に〈手引き〉への「語らふ」行為へと転じていく。次に引用する文脈は、前節で引用した場面(Ⅱ)の続きで、〈慰め〉の「語らひ」から〈手引き〉への「語らひ」へとまさに転じた瞬間である。

(Ⅲ)　かくて院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。「昔より、かく命もたふま

じく思ふことを、かかる親しきよすがありて、御有様を聞き伝へ、たへぬ心のほどをも聞しめさせて頼もしきに、さらにそのしるしのなければ、いみじくなむつらき。…〔中略〕…」とうちうめき給へば…〔下略〕

（「若菜下」二一八・二一九頁）

これまで小侍従の話を「聞き伝へ」られることで〈慰め〉られていた柏木であったが、遂にその心の内を積極的に語り出す。そこで語られたのは、実は「聞き伝へ」られることが、もはや〈慰め〉となっていなかったことである。女三の宮への「たへぬ心」の訴え、そして「しるし」がないことが「つらき」と吐露する。この「つらき」対象は、主従どちらか一方ではなく女三の宮、小侍従の両者へ向けられた言葉であろう。これまで語られてこなかった柏木と小侍従の「語らひ」の実態と柏木の想いが、小侍従との「語らひ」によって読者にも示されるのである。

この「語らひ」の空間は、「人目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ」と柏木は小侍従を自邸へと迎え入れて、これまで以上に「いみじう語らふ」ことに徹する。この「語らひ」は「迎へとりつつ」とあるように定住ではなく、必要に応じて繰り返される呼び出しである。しかも、今回は「人目少なくしめやかならむ」折であり、これは手引きを想定した場の演出であると考える。そして、これまでのような「御有様を聞き伝へ」られるに留まることが限界であると「うちうめ」くのであった。「うめく」とは、嘆息のことであり、自分の意にそぐわなかったり、不満であったりしたときの心情を表出する身体表現である。落葉の宮に執心する夕霧は、雲居の雁に対して「うちうめく」演技をしている（「横笛」三五八頁、「夕霧」四二八頁）。ここでの柏木の「うちうめく」行為も、演技の可能性が高い。少なくとも小侍従は演技として捉えているのではないかと思われる。「うちうめ」く柏木に対して、場面（Ⅲ）に続く文脈では、「あなおほけな」（「若菜下」二一九頁）、「うちほほ笑みて」（二一九頁）と深刻に受け止めていない小侍従の姿が語られるからである。

ここで、小侍従が口にした「おほけなし」は、小侍従から繰り返し柏木へと向けられる表現である。

一、小侍従、「いで、あなおほけな。それをそれとさしをきたてまつり給て、また、いかやうに限りなき御心ならむ」…〔下略〕（「若菜下」二一九頁）

二、「これよりおほけなき心は、いかがはあらむ。いとむくつけきことをも思しよりけるかな。何しに参りつらん」とはちぶく。（「若菜下」二二〇頁）

三、この人も、童よりさるたよりに参り通ひつつ見たてまつり馴れたる人なれば、おほけなき心こそうたておぼえ給つれ、いまはと聞くはいと悲しうて…〔下略〕（「柏木」二九二頁）

小侍従は、女三の宮に対する柏木の心を知ってからは、「おほけなし」と一貫して非難する。山本利達氏の報告によると、全二十九例中、柏木と女三の宮に関係するものは、十二例と集中して多いことが分かる(14)。柏木と女三の宮関係においては、「おほけなし」が重要なキーワードであり、禁断としての絶対的な重みをもつ(15)。また、「おほけなし」とは、本来上位の者が下位の者に対して使用する待遇表現であり、侍女が男君に対して「おほけなし」と使用する例は、この三例だけの特殊な発言の位相にあると牧野高子氏は指摘している(16)。つまり、小侍従は母侍従の乳母を介して、柏木の「語らひ人」という親しい関係にあったが、主人である女三の宮への想いに対しては「おほけなし」という毅然とした、しかし侍女の立場からすれば分をわきまえないような痛烈な口調で柏木を非難している。主人への懸想に毅然とした言葉で対応する侍女の姿がここでは語られている。

そうした小侍従の姿は、言葉だけではなく態度にも表れている。柏木の発言に対しては、「うちほほ笑みて」（「若菜下」二一九頁）、「言ふかひなくはやりかなる口ごはさ」（二一九頁）、「はちぶく」（二二〇頁）、「腹立つ」（二二一頁）など、柏木のことを小馬鹿にしたような侍女としての立場とは思えないような強気な態度を取っているのである。こうした言動の背景には、昔からの親しさ以上に主人の婿が光源氏であるという矜持が作用していると考える。柏木は衛門督から中納言に昇進したとはいえ、准太政天皇の光源氏と比べてみれば足元にも及ばない。婿としての格が違いすぎるのである。小侍従が「少しもものしく、御衣の色も深くなり給へれ」（二一九頁）と柏木の身分の低さを非難するのは、雲居の雁の乳母が夕霧を「六位宿世」（「少女」五七頁）と非難したのと似ている。小侍従の柏木に対する言動は、懸想する男君への乳母の態度（個人の恋愛よりも家と家との結びつきである婚姻を重視）と遜色ない。

小侍従の「はちぶく」、「腹立つ」態度には、実は柏木の次の発言が大きい。

ただ、かくありがたきものの隙に、け近きほどにて、この心の中に思ふことの端少し聞こえさせつべくたばかり給へ。（「若菜下」二二〇頁）

柏木は、手引きを依頼する「語らひ」の場を計画的に用意していた。（Ⅲ）の場面、小侍従が「迎へとりつつ、いみじう語らふ」場は、「院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむ」折であり、まさに柏木が「かくありがたきものの隙」と言う「かく」が指し示す状況であった。このように手引きの仮想状況を演出し、手引きのための「たばかり」を依頼するのであった。これに対し、小侍従は先に指摘した「おほけなし」と身分不相応な柏木の心を非難するのである。そして、「何しに参りつらん」（二二〇頁）と呼ばれたことまで非難する始末である。ここには、これまでの「語らひ」とは明らかに異なることへの小侍従の苛立ちが見て取れる。小侍従がここまで憤慨するのには、柏木の「たばかり給へ」という発言が大きい。「たばかる」行為は、光源氏と藤壺の密通において、語り手が「いかがたばかりけむ」（「若紫」二三一頁）と語っていたように、「かくろへごと」と関わる重大な行為である[17]。それゆえ、「たばかる」ことになれば、手引きする侍女の負担は大きく、かつ主人への裏切り行為にもなるので、その後の主人との関係悪化の可能性は計り知れない。侍女の主人に対する「たばかり」は、多くの侍女にとって「わづらはし」（「若菜下」二五七頁）いことなのである。

「たばかる」ことを一度言葉にした柏木は、さらに「ただ一言、物越しにて聞こえ知らすばかり」「神仏にも思ふ事申すは、罪あるわざかは」（「若菜下」二二一頁）と畳み掛けるように、しかし柔和な態度でひとこと言葉を交わしたいだけであると訴えるのであった。そしてこの長い二人の「語らひ」の末に、「人のかく身にかへていみじく思ひの給ふを、えいなびはてで」（二二二頁）と「身にかへ」た柏木の誓言に根負けした形で小侍従は「たばかる」と口にしてしまう。

もの深からぬ若人は、人のかく身にかへていみじく思ひの給を、えいなび果てで、「もし、さりぬべき隙あらば、たばかりはべらむ。院のおはしまさぬ夜は、御帳のめぐりに人多くさぶらひて、御座のほとりに、さるべき人かならずさぶらひ給へば、いかなる折をかは、隙を見つけはべるべからん」とわびつつ参りぬ。「いかにいかに」と日々に責められ困じて、さるべき折うかがひつけて、消息しおこせたり。喜びながら、いみじくやつれ忍びておはしぬ。（「若菜下」二二二頁）

ここでは、これまでの柔和な「語らひ」を重視してきた柏木から一転して、手引きを侍女に迫る他の男君たち同様の「責む」姿が語られる。柏木の度重なる「語らひ」に、小侍従はとうとう「もし、さりぬべき隙あらば、たばかりはべらむ」と柏木の「たばかり給へ」という「語らひ」に応じてしまう。しかし、これはあくまで「もし」と話頭にあるように、仮定の発言であった。しかし、「たばかる」という共通表現の共有、交換によって、柏木は承諾したものと認識してしまうのであった[18]。この誤認こそが、柏木を「責む」という新たな行動へと導くきっかけとなる。

以後の柏木は「語らふ」ことを止め、「責む」へと行動を転じるのである。そして、小侍従が「「いかにいかに」と日々に責められ困じ」た直後、逢瀬へと展開していくのである。このように、手引きを懇願する長い「語らひ」に対して、「責む」から手引きまでの素早さは、男君の「責む」行為を侍女が回避する術はないことを示している。

小侍従は「軽薄」「軽率」な侍女としてしばしば指摘される。確かに、『弄花抄』も「小侍従が心ちとゆるびたる性、女宮のためあしき事也」(19)と評するように、御帳台の内にまで柏木を導いてしまった小侍従の行動や、「責む」行為を発動させてしまったことは軽率であったかもしれない。「もし、さりぬべき隙あらば、たばかりはべらむ」という発言は軽率であったかもしれないが、その発言に至るまでの小侍従の言動は、まるで養君の将来を大切に思い自由恋愛から守ろうとする乳母のようで、決して軽率とはいえないものであることは、これまで見てきた通りである。

小侍従の手引きは、むしろ柏木の「語らひ」能力の高さとその巧みさによる結果であったと言えはしないか。柏木は、その「語らひ」能力の高さに加え、巧みな状況演出により、小侍従の「たばかる」という発言を引き出したのである。小侍従は、女三の宮のもとへ柏木を手引きした結果として「もの深からぬ若人」と呼称されるが、これは「たばかり」に応じた文脈での位相にあることに注意したい。つまり、小侍従の全部が「もの深からぬ若人」なのではないということである。

女三の宮との密通は、度重なる柏木の巧みな「語らふ」行為によって、小侍従が手引きする侍女へと転回させられてしまったことで可能となったのである。小侍従との「語らひ」を通して、柏木の心の表面化だけではなく、柏木の巧みな「語らふ」行為が明らかになったと言えよう。柏木の「語らひ人」と称される小侍従は、主人である女三の宮の内面を物語の表に引き出すのではなく、柏木の「語らひ」に絡め取られ、柏木との「語らふ」関係を中心として、柏木の内面を読者に示す存在なのである。

おわりに

若菜巻においては、多くの作中人物たちが、言葉を発し、対話することで彼らの心の内を読者の前にさらけ出す。柏木と小侍従も多くの対話を交わし、二人の言葉のやりとり、言動を通して、互いの心が表面化される。柏木の女三の宮に対する〈慰め〉から〈手引き〉へ向かう心の変化は、柏木と小侍従の「語らひ」によって明らかにされる。手引き後の侍女の心情や変化の様相については、別稿で論じたい。

『源氏物語』の伺候者に注目してみると、第一部では、主人同士を繋ぎ、代弁者としての伺候者の姿が、第二部では、本稿で考察したように主人たちの内面を炙り出していく伺候者の姿が語られる。そして、第三部では、主人以上に動き回ることで、伺候者が物語を動かしていくように、主人と伺候者の関係から物語構造が見えてくるのである。伺候者たちの存在は、縦と横の人物関係の中で主人たちの内面や思考を読者に示し、主人たちの新たな側面を引き出していくのである。

注

(1) 拙稿「『源氏物語』における手引きする侍女」『「記憶」の創生―1971-2011』翰林書房、平成二十四年。

(2) 千野裕子「「侍従」「右近」とふたりの女房―女房が示す遠い正編」『女房たちの王朝物語論　『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』』青土社、平成二十九年。

(3) 『源氏物語』の本文引用は、「若菜上」「若菜下」「柏木」は明融本（『東海大学蔵　桃園文庫影印叢書』、東海大学出版会、平成二年）、それ以外の巻は大島本（『大島本　源氏物語』角川書店、平成八年）に依り、ミセケチは二重傍線、心内表現は〈　〉、発話表現は「　」とし、私に改めた箇所は傍記を施した。また、便宜を図り、（　）内には、新編日本古典文学全集の巻名・頁数を記し

た。尚、直前に引用した本文と同じ巻の場合は、頁数のみを記した。

（4）注（1）前掲論文。

（5）山口明穂「かたらふ」『王朝語辞典』秋山虔編、東京大学出版会、平成十二年。

（6）「語らひつく」については、『源氏物語註釈二』（風間書房、平成十二年）に「いずれも男女の関係について言うが、多くは正式な関係ではなく、好き心に任せたかりそめのものである。また、「語らひつく」相手の女も、女房や侍従等で、歴とした結婚相手としての扱いを受けていない」（二九〇・二九一頁）とある。また、西村亨氏も「あまり好意のない言い方で男が女と交渉を生じたこと」で「恋の発展の段階のひとつとして男女の間が成立したこと」（「かたらふ―心にしみる語りかけ―」『新考　王朝恋詞の研究』おうふう、昭和五十六年）と指摘するように、柏木と小侍従の関係はそういった可能性も孕んでいるが、男女の恋愛面とは切り離した関係として捉えた方がよいと考える。

（7）吉海直人「乳主考」『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』世界思想社、平成九年。

（8）三谷邦明「暴挙の行方・〈もののまぎれ〉論（一）―女三宮と柏木あるいは〈他者〉の視点で女三宮事件を読む―」『源氏物語の方法』翰林書房、平成十九年。

（9）秋山虔「蹴鞠の日―柏木登場」『講座源氏物語の世界』第六集、有斐閣、昭和五十六年。

（10）「語らひ人」という表現は、必ずしも男女の情交関係を意味するわけではない。『源氏物語』における「語らひ人」は四例あり、末摘花にとっての「琴」（「末摘花」二六七頁）、明石姫君の乳母（宣旨の娘）にとっての「明石の君」（「澪標」二九五頁）、柏木にとっての「小侍従」（「若菜下」二一七頁）、薫にとっての「浮舟」（「蜻蛉」二六〇頁）である。末摘花の琴にように、人間に限らず物にも用いられる例もある。男女間に用いられた際には背後に情交関係を仄めかす場合もあるが、積極的に首肯すべきではないと考える。

（11）阿部好臣「喩と心象風景―柏木の猫」『物語文学組成論Ⅰ―源氏物語』笠間書院、平成二十三年。

（12）石田穣二「若菜の巻について」『源氏物語論集』桜楓社、昭和四十六年。

（13）高橋亨「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」『源氏物語の対位法』東京大学出版会、昭和五十七年。

（14）山本利達「「おほけなし」考」『奈良大学紀要』第二十五号、平成九年三月。

（15）伊藤博「柏木の造型をめぐって」『源氏物語の原点』明治書院、昭和五十五年。

（16）牧野高子「『源氏物語』の女房「小侍従」―手引きに至る心情について―」『論輯』第三十二号、平成十六年三月。

（17）加藤宏文「王命婦から小侍従へ―「かくろへごと」展開の視点」『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』勉誠社、平成五年。

（18）ここでの「たばかる」という言葉の共有は、その交換によって心の紐帯を仮構する和歌の場と似ている。柏木は女三の宮からの「あはれ」という言葉を一貫して希求し、それは、「自分への共感の証」として受け取るが「しょせん言葉でしかないという人間の孤立性を証する」と、柏木の言葉に対する特質を鈴木日出男氏（『『源氏物語』の和歌的方法』『古代和歌史論』東京大学出版会、平成二年）は指摘する。ここでの「たばかる」も柏木の「共感の証」であろう。

（19）本文引用は、源氏物語古注集成による。

【付記】本稿は、平成二十二年度日本文学協会第三〇回研究発表大会（於・フェリス女学院大学）における口頭発表の一部を加筆・修正したものです。発表の席上、および前後にご意見ご教示いただいた諸氏に、記して深く感謝申し上げます。

池田大輔　国文学科講師　日本古典文学（中古文学）